

ピーくん財団とともに考える 足立の教育のこれから

ピーくん財団による小中学校応援事業をきっかけに、足立区教育長の中村明慶氏とピーくん財団の理事長である庄司眞氏が対談。足立区の教育の現在地と、子どもたちの未来について語り合った。



足立区を拠点に活動するピーくん財団と足立区教育委員会が対談。地域に根ざす財団と学校、行政が連携し、子どもたちの学びを支える取組みが広がっている

一般財団法人ピーくん財団
理事長
庄司眞さん
財団の理事長であり、ピー
アークホールディングス株
式会社 代表取締役社長。
企業活動と公益活動の両軸
で幅広く活動している

足立区教育委員会
教育長
中村明慶さん
足立区教育委員会 教育長。
教育行政の責任者として、
学校教育の質の向上や地域
と連携した学びの環境づく
りを推進している



中村さんは区役所に約40年勤務。福祉分野を中心にキャリアを重ね、福祉部長などを歴任してきた



学校への備品支援の一例。寄贈したハードルは授業以外に地域イベントでも活用され、子どもたちがより多く参加できるようになった

学校があるんですか？
中村…足立区には公立の小学校が67校、中学校が35校、合わせて102校あります。そして、新規採用の教員も毎年200名以上。若い先生が多いので、授業力を高めていくことも重要な課題になっています。

庄司…教員の指導力を向上させるために、どのような取組みがあるのでしょうか？

中村…たとえば、子どもと教師の信頼関係を土台とした授業づくりで知られる秋田県大仙市に教員を派遣する取組みですね。秋田で学んだ先生たちは、熱量と経験を持ち帰る。この循環を10年以上続けてきました。その成果として「足立スタンダード」と呼ばれる問題解決型の授業スタイルが確立できています。小学校から中学校まで9年間、安心して学べる授業スタイルです。教員が他自治体に異動した際、「足立区の先生は優秀だ」と評価されることも多いんですよ。庄司…それは誇らしいですね。確かに私の学生時代を思い返しても、若い先生

「誰と一緒にやるか？ その考えで 楽しさも社会も変わっていくのです」

足立区の課題を解決したい。
教育支援がつながりを生む

庄司…足立の学校を支援するピーくん財団が設立されたのは、2016年のことです。私の父でありピーアークの二代目社長、庄司正英が立ち上げました。そこにあつたのは、会社だけでは手が届きにくい活動を、別の人たちで展開していきたいという考えです。事業の枠を超え、社会課題の解決に貢献したい。その想いが原点です。

中村…もともと財団では、ワークチン支援やスペシャルオリンピックスなど幅広い社会課題に対する支援を行っていらっしやいますね。足立区の教育支援に力を入れるようになったのは、どんな背景がありますか？
庄司…やはり私自身が足立区で生まれ育ったということが大きいですね。地域に何かを還元したいという想いがあり、活動の範囲をフオーカスするようになりました。また、財団の活動と会社の理念をリンクさせたという考えもあつたんです。



ピーアークのアイコンである「ピーくん」を前に、対談の間には和やかな笑顔も。地域の未来について語り合うひとときが続いた

中村…そうですね。学校を回って感じるのは、足立区の子も私たちは明るく素直な子が多いという事です。若い教員たちも

あつて、子どもたちだけでなく教員のみなさんもコミュニケーションが取りやすい印象です。中村…足立区では学校給食にも力を入れています。食育の一環として、栄養士が工夫した献立を作っています。『東京・足立区のおいしい給食レシピ』というレシピ本が作られるほど注目されており、足立区の教育の特色のひとつになっています。庄司…食べ残しも減ったとお聞きしましたが…何より美味しそう。いまの子もたちがうらやましいですよ(笑)。



2025年より財団の理事長に就任し、社会貢献活動に取り組む一方、1951年創業の家業を継ぎ、代表取締役としてエンターテインメント事業を展開する

ピーくん財団とは？

ピーアークグループが2016年に設立した一般財団法人。地域とのつながりを大切にしながら、子どもたちの成長を支える教育・福祉支援をはじめ、ワクチン事業や障がい者スポーツなど、多様な分野の団体への寄付・助成を通じた社会貢献活動を行っている。

足立の教育の現在地とは 現場主義が育てる教育力

庄司…今回は対談の機会をいただきありがとうございます。私は足立区で生まれ育ち、地域への想いはとても強いのですが、中村さんは足立区の教育をどのようにご覧になっていますか？
中村…私は2024年に教育長に就任しました。そこでまず取り組んだのは、学校の現場を見ることで、区内すべての学校を一年かけて回りました。教育を良くしていくためには、教員たちをはじめ、校長も含めた現場の想いが何より大切だと考えています。私は一年の視察を経て、子どもたちが元気に学校生活を送っている現場を目の当たりにしてきました。
庄司…区内には、どれぐらいの

中村…それは、どんな理念なのでしょう？

庄司…「楽しさ」を社会に提供することです。だけど、ただ「楽しい」といっても、その形は様々です。大切にしているのは「何をやるかよりも、誰とするかのほうが重要だ」という考えです。たとえば、同じ映画を毎日見続けると飽きますが、一緒に見る相手が変われば感じ方も楽しみ方も変わります。人とのつながりがあれば、楽しみは変化し、持続するのです。
中村…私も大いに共感しますね。やはり「つながり」は学校運営にとっても非常に大切です。学校は先生と子どもたちだけではなく、保護者や地域の方など、多くの人に支えられています。
庄司…そうですね、私自身も地元の学校で出会った友人とは生涯の付き合いになっています。そうしたつながりが地域に生まれば、地域への愛着が増すかもしれません。財団として、そうした関係づくりに少しでも貢献していければと思います。

「公だけでは届きにくい課題でも、民間だから取り組めることがある」

学校現場のリアルとは
現場から見える教育課題

中村…ここまで足立の教育の長所を語りましたが、学校施設の老朽化という課題も立ちはだかっています。そうした中で、地域企業や団体から備品などの寄贈をいただくことは、学校にとって非常にありがたい支援です。「小中学校応援事業」では、どのように現場のニーズに即した支援をされているのですか？

庄司…公募という形で学校から要望を出していただき、その内容を見ながら支援を決めています。要望を見ても、音楽活動の発表会にまつわるもの、空いている教室を活用して不登校の子どもたちが集まれる場所を作りたいという要望など、本当に様々なニーズがありますね。同時に、先生方が日頃から子どもたちの様子をよく見ていることも伝わってきました。

中村…そこまで見ていただけなのは嬉しいですね。区の予算で学校に配分する場合、学校規模などを考慮しながら、できるだけ公平になるよう配慮しています。そのため、特定の学校や取組みに柔軟に予算をつけること

やりたいことが叶うまち
つながりが育てる地域の力

庄司…ピーくん財団の今後の活動ですが、「地域」と「つながり」という軸はぶらさずに続けていきたいですね。学校支援事業を起点にしながら、地域に新しいつながりが生まれる取組みを応援していきたい。

中村…本当に素晴らしい取組みですので、ぜひ継続していただけたらありがたいですね。学校現場からは、物品の支援だけでなく、企業の方を講師として招いたり、様々な職業の話聞く機会にも広がっていくとよいという声もあります。学校と社会がつながる取組みに広がっていけば、さらに意義のある事業に

が難しい場合もあります。**庄司**…そうしたピンポイントの困りごとへの支援は、我々が民間だからこそ柔軟に支援できる。そこが財団としての役割であり、強みだと感じます。

ただ「困っている」というだけではなく、それぞれの学校が、子どもたちにどんな力をつけてほしいかを考えたうえで要望を出していることが分かります。**庄司**…まさに今日訪問した島根小学校もその一例ですね。ストラックアウトのボードを購入していただきました。楽しんで使ってもらえているようで、嬉しい限りです。

ボールを投げる力が東京都平均と比べてやや低いというデータがあり、島根小の校長も同様の課題認識だったそうです。ストラックアウトで遊ぶことで、自然とボールを投げる機会が増え、体力向上につながるのではないかと考えています。学校ごとに課題は異なるので、状況に合わせて子どもたちにとって意味のあるものを選んでいただいたのだと思います。



足立区立島根小学校への支援として導入されたストラックアウト。遊びながらボールを投げる機会を増やし、子どもたちの体力向上につなげる取組みだ。日常の遊びの中で運動習慣を育むことを目指している

なると思います。**庄司**…足立区の未来という意味でも、やはり「つながり」はとても大切だと思っています。例えば、地元のお祭りが、担い手不足で存続の危機にあるという話も聞きます。

仲間と協力して解決する「協働的な学び」や、一人ひとりに合った「個別最適な学び」を大切にするようになりました。学校は勉強だけの場ではありません。防災なども含めて、地域や社会の課題に目を向けるきっかけとなる場でもあります。

本計画がスタートしました。コンセプトは「区民のやりたいことが叶うまち」です。**庄司**…それは興味深い。ポジティブで、まさに未来に向けたまちづくりの宣言ですね。**中村**…ええ。足立区は様々な課題もありましたが、少しずつ改善してきています。そこで今回は課題の克服だけでなく、「やりたいことが実現できるまちにしたいこころ」という前向きなメッセージを掲げているんです。子どもたちにも、自分が叶えたことを見つけて、挑戦する気持ちを大切にしたい。

人が集まり交流する場は、地域の共同体に欠かせないものです。世代を超えたつながり、そうした場づくりにも関わっていかれたらと思います。

中村…教育の現場も、この数年で大きく変わってきています。子どもたち自身が課題を見つけ、

中村…未来の話で言えば、足立区では2025年から新しい基礎

綾瀬駅ガード下の交流拠点「あやセンターぐるぐる」も話題に。地域の新しい居場所づくりや、人がつながる場への期待が語られた

子どもたち自身が課題を見つけ、

「つながりが生まれる場所で、地域の未来を一緒に創っていきたい」

を持って取り組んでいることを改めて感じました。そうした取組みを多くの方に知っていただくお手伝いを、私たちも民間の立場からできればと思っています。人と人とのつながりを生み出し、子どもたちの未来につながる取組みを応援すること。私たちができることがあれば、これからも積極的に関わっていきます。足立区の皆さまと一緒に、地域の未来を作っていけたら嬉しいです。



右) コロナ禍で活動が途切れていた小学校の金管バンドが再始動。シンボルとなる衣装をピーくん財団が支援した。左) 地域からは再開を喜ぶ声が寄せられ、イベント出演の依頼も届いているという



学級に入りづらさを感じる児童のため、多目的テーブルや椅子で安心して過ごせるスペースを整備